

脳梁を含む前頭葉内側部損傷後の Alien hand syndrome に対し  
低頻度反復性経頭蓋磁気刺激療法を施行した一例

神津 美沙都、宮崎 保奈美：桔梗ヶ原病院 リハビリテーション部  
原 寛美：桔梗ヶ原病院 高次脳リハビリテーションセンター

【はじめに】 Alien hand syndrome (以下 AHS) は 1908 年に Goldstein によって初めて報告された。その後、1981 年に Goldberg が前頭葉内側面に病変を有する患者の右手が意志に逆らって道具を使用する現象を報告し、一般に知られるようになった。他人の手徴候、本能性把握反応、道具の強制的使用、拮抗失行などの症状が認められるとされている。AHS に対して健常側大脳半球一次運動野手指領域に対して低頻度反復性経頭蓋磁気刺激療法 (以下 rTMS) を施行することにより、AHS の改善を認めた報告がされている。(原ら 2014、岩井 2015) 今回、左前頭葉内側部と脳梁の損傷による AHS を呈した症例に対して、低頻度 rTMS を施行し、AHS の改善が得られた症例を経験したため、報告する。

【症例】 40 代女性。両利き。職場の屋根から転落し、救急搬送された。急性硬膜下血腫、左前頭葉内側部外傷性脳内出血、脳挫傷、びまん性軸索損傷を受傷し、血腫除去手術が施行された。45 病日後、リハビリ目的で当院へ入院となった。運動麻痺は認めず、右側上下肢に軽度感覚障害が認められた。MMSE : 14/30 点、RBMT : 6/24 点、SP-A : 有 1-2-4 無 0-0-0、Kohs 立方体 : 不可、BADs : 6/24 点であり、記憶障害、遂行機能障害を主とした高次脳機能障害が認められた。AHS として本能性把握反応、拮抗失行、道具の強制的使用等が認められた。右手の STEF は AHS の影響から測定困難であった。131 病日目から 154 病日目にかけて、右側大脳半球一次運動野手指領域に低頻度 rTMS を実施した。結果、本能性把握反応、拮抗失行、道具の強制的使用等の AHS 症状は改善し、右手の STEF97 点へ右上肢機能の改善が認められた。本症例の AHS が改善した機序について低頻度 rTMS の効果と文献的考察を加えて報告する。